

小児科だより vol.11

『でべそ』の治療？

2017.7.3 発行

こんにちは。梅雨に入り蒸し暑い毎日が続いております。小児科外来も例年通り、この時期に流行する、溶連菌感染症やアデノウイルス感染症のお子さんが増えてきました。今回の小児科だよりは、『でべそ』と意味は同じようで少し異なる、『臍（さい）ヘルニア』に関するお話です。



臍ヘルニアは、臍帯脱落后から生後1か月頃に臍部が突出することで気づくことが一般的です。赤ちゃんが泣くと大きくなり、普段は指で簡単に戻すことができます。多くは生後2-3か月頃に最大となり、その後縮小していく経過をとることが多く、赤ちゃんの4%程度に発生し、1歳までに約80%、2歳までに約90%が自然治癒するとされています。その多くが自然閉鎖することから、いわゆる『経過観察』とされることが多かったのですが、2000年頃より小児外科の先生方を中心に、臍圧迫療法により臍ヘルニアが早期に治癒し、臍突出症（いわゆる『でべそ』）を予防できるということが報告されるようになりました。一つの例ではありますが、生後早期に圧迫を開始したグループ（圧迫群）と経過観察したグループ（経過観察群）の比較検討において、圧迫群では生後6か月までに100%臍ヘルニア治癒を見たのに対し、経過観察群では生後6か月までの自然治癒が45.8%のみで、20.8%は1歳を過ぎても治癒しなかったという報告がされています。

臍ヘルニアの圧迫療法に関しては、昔から10円玉やボタンなどを綿にくるんで圧迫する民間療法が行われてきました。これらの民間療法のデメリットとして、皮膚障害や皮膚炎などの副作用を認めることがあり、もともと自然治癒することが多いことから、圧迫療法に対して小児科医の中にも否定的な意見があったのも事実です。しかし、現在皮膚炎に関しては、テープなど材料の改良により、そのリスクは大幅に減少しています。

臍ヘルニアは生後2-3か月で最も大きくなるといわれているため、伸びてしまった皮膚の余剰を防ぐためにも、可能な限り早期に圧迫療法を開始することが重要と考えられます。当科でも外来で簡単に出来る臍圧迫療法の指導を行っています。興味を持たれた方は、小児科外来へご相談ください。